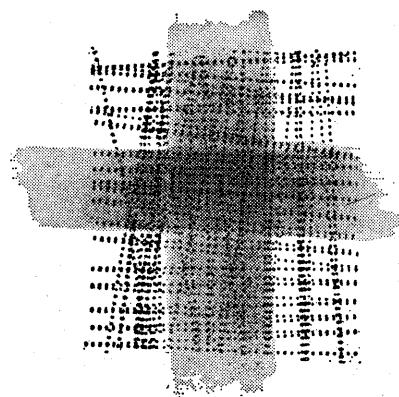


(27) 中城 ふみ子

中城 ふみ子は本名富美子、大正十一

年、北海道帯広市の野江家に生まれた。

近代短歌に現われた子ども（十三）



大塚 雅彦

生家は始め雑貨商、後に呉服商となつた。序立帯広高女を卒業し、更に上京して東京家政学院を卒えた。昭和十七年四月、札幌で鉄道技師中城博（北大卒）と結婚（三十才時）し、三男一女をあげた（次男は夭折）。昭和二十一年頃より夫と不和になり、二十五年から別居、二十六年遂に離婚するに至る。昭和二十九年八月、三人の子をのこして札幌医大癌病棟で三十二才の生涯を終った。現在、帯広神社の裏手にあるふみ子の歌碑「冬の皺よせゐる海よ今少し生きて己れの無惨を見むか」の歌の如く、この世に尽きせぬ思いをとどめて——である。

彼女の歌と生涯は、彼女の短歌を読み感激して取材のためはるばる彼女を訪ね、彼女のとりこになつて病床につき添つた時事新報記者若月彰のルポルタージュ風の著書『乳房よ永遠なれ』（昭30）でいち早く紹介された（その後、女優から転進した田中綱代監督によつて同名の映画にもされている）が、更に、ふみ子の亡くなる四ヶ月前に札幌医大に医学生として入学し、後に直木賞作家となつた渡辺淳一の作品『冬の花火』（始め歌壇綜合誌「短歌」に昭和四十七年四月から四十八年十二月まで連載され、昭和五十年十一月単行本として刊行）に小説化され、このユニークな歌人の行実が広く知られるに至つている。

彼女は女学校在学中より短歌に親しみ、家政学院在学中に歌を作つて教師の池田龜鑑（国文学者）に指導を受けた。昭和二十二年、北海道の結社誌「新堀」に入社し小田観螢に師事、二十三年に「辛夷」の会員となり野原水嶺に師事、二十六年には「山脈」同人になる。二十七年に中央の女流綜合誌「女人短歌」会員となり、二十八

年には「潮音」入社、二十九年には「凍土」同人となる等、実に目まぐるしく多くの結社に関係した。二十九年四月、歌壇綜合誌「短歌研究」四月号に、「第一回五十首詠募集」に応募した彼女の作品が特選となり「乳房喪失」の題名で発表されて一躍注目を浴び、続いて同じく綜合誌「短歌」の同年六月号には川端康成の推薦文つきで、「花の原型」と題する五十一首が巻頭に掲載された。この二つの綜合誌への登場は、囂々たる賛否両論をまき起し、ショッキングで華やかなスターの登場の感を与えた。「身ぶりを誇張している」とか「全体がつくりものだという気がする」とかきびしい批判が多かつたが、文壇の大家川端康成の推奨とか歌人でも宮松二等の支持もあって、「中城旋風」という語が出るくらい、歌壇は湧いたわけである。当時、新人发掘を目指していた歌壇ジャーナリズムのニードの流れに乗つた好運もあつた。この二十九年という年は中城のみならず、後に前衛歌人として著名になつた塚本邦雄の「装飾楽句」とか、寺山修司の「チエホフ祭」とかが「短歌研究」に載つた

年でもあり、これは同誌の編集者であった中井英夫（現在は作家）の演出による面が強く、げんに中城ふみ子の特選詠は原題が「冬の花火——ある乳癌患者のうた」であつたのを、中井が勝手に「乳房喪失」と変えて発表したものであることを、後に中井自身が回顧的に書いている（中井『黒衣の短歌史』昭46・6）。

ふみ子は乳癌のため二十七年四月に先ず左の乳房を、次いで翌年十月には右の乳房を手術で切断し、女性の生命ともいうべき両乳を失うという悲哀を味わうが、後に癌は肺に転移し末期的癌患者となつてゆく。しかし、その二年の間にも“恋多き女”として彼女は愛の焰を燃やし続けた。渡辺淳一の小説では、彼女が夫の他に六人の男と愛を交した華麗な“愛の遍歴者”として描かれている。いなればこの男らとの愛の交流と、そのはげしい文学的噴出ともいうべき短歌制作とに支えられて、彼女は短かい人生を一気に駆け抜けて生きたのであり、私はフランスの文豪スタンダールの墓碑銘「生きた。恋した。書いた。」が、ゆくりなくも想い出される。彼女の歌

集には川端康成の序文がある『乳房喪失』（昭29・7）と、歿後の刊行である『花の原型』（昭30・4）があり、角川版『定本中城ふみ子歌集・乳房喪失—附花の原型』（昭51・2）や、現代歌人文庫版『中城ふみ子歌集』（昭56・3）も刊行されている。彼女の登場は短歌史的には突然変異的に唐突のものであり、彼女の作品ほど毀譽褒貶にさらされたものはないが、「その特異な生き方と大

胆な表現は罵声を浴せられながらも、前衛短歌から新鋭の登場をうながす導火線となつた」（短歌研究社版『系譜別現代歌壇総覧』昭41）といえるであろうか……。

①悲しみの結実の如き子を抱きてその重たさは限りもあらぬ

②われに最も近き貌せる末の子を夫がもて余しつつ育てるるとぞ

③夜ふけて涙ぐみつつ子に還すもろき手の爪のエナメルはがす

④父の家にかくれて遊びに行きし子を待ちて出づれど

黒き冬の川

⑤メスのもとひらかれてゆく過去がありわが胎児らは  
闇に蹴り合ふ。

⑥鼻に皺よせて笑ふ子は掌中の珠など優しきものに  
はあらぬ

①は『乳房喪失』第一部「裝飾」の「白き茎」と題する一連の中にある。ふみ子は前述の如く昭和二十六年に離婚、末子は中城家に引取られたが、長男（時に八才）と長女（五才）は彼女のもとに残った。その不幸な子供たちを「悲しみの結実の如き子」と歌つたのである。彼女は比喩や比較が巧みで、「失ひしわれの乳房に似し丘あり冬は枯れたる花が飾らむ」等は有名であるが、この

①の歌のすぐ次にも「陽にあそぶわが子と花の球根と同じほどなる悲しみ誘ふ」という作品がある。夫とは長い確執の末に離別したが、その親の悲劇の被害者である子を歎いていると共に、「その重たさは限りもある」などといふ叫びは、母自身の自己愛の嘆きということになる、と菱川善夫氏は述べている（菱川『鑑賞中城ふみ子の秀歌』昭53・5）。

②も第一部の「冬の火事」一連の中にある。別れた夫の方に引取られた末子潔（離婚時三才）を想う作品である。夫は国鉄のエリート技師であつたが、業者に陥り入れられ所長の椅子を失い、生活が荒廃、国鉄を退職後も職を転々、愛人を作つたり、後に詐疑で逮捕されたりする。そのような夫のもとで育てられている幼な子をおもいやる心情は、やはり母親のものである。しかし、彼女の、子思いの歌はパセティッシュにならず、どこか醒めたものがある。この歌の「貌」を「顔」としなかつたのは「外面の印象をひきたてるためであろう」と、菱川氏は前掲書で述べている。

③は同じく「愛の記憶」の一連にある。昼間は「女」としてエナメルを手の爪に塗つていたのを、夜になつてそのマニキュアをはがして、情にもろい母親の手にして子供に還す、というのであろう。恋する“女”から“母親”への転換を、このような爪を操作する動作を媒介にして描いた作品を、私は他にあまり知らない。次に「子を抱きて涙ぐむとも何物かが母を常凡に生かしてくれ

ぬ」「幼らに氣づかれまじき日の隈よすでに聖母の時代は過ぎて」等の作品が続いているのを見ると、もはや「常凡の母」「聖母」ではあり得なくなっている自己を覚知しているのであろう。異性への愛情や文学をおもふところが、彼女を驅り立てて「母親喪失」にしてしまったのだ。その悲愛もまた彼女自ら招いたものである。

④も同じく「乳母車」一連の中にある。「黒き冬の川」という語が心象風景めいていいる。一連にはこの他に「瞑いかりつつ見据うればあはれ甘酸ゆき杏あまざくわの核からのごとき子の顔」「コスモスの揺れ合ふあひに母の恋見しより少年は粗暴になりき」「物陰にたどたど繻帶巻ける子は母に明かせぬ傷口もちて」等があり、いずれも父母の争い、離別や、母の恋などで傷つき、外傷体験を持つてゆく子が描出されている。結社誌に初出時は「或るストオリイ」の原題だった由、やや小説めいたストーリー構成になっている。

⑤は『乳房喪失』第二部「深層」の中の「葬ひ花」一連にある。乳癌手術の内容が生々しく詠まれている作品が多い一連だ。「メス」は今までなく癌の患部を切除してゆくのだが、それがわが「過去」を「ひら」いてゆくことになる、というのだろう。そして、この「胎児ら」というのは彼女が過去にみごもつた胎児達ではなく、「まだこの世に生まれざる生命・未生の生命の象徴として理解すべきもの」と菱川氏は前掲書で述べている。つまり、「肉体の奥に植えつけられた原初的生命感そのもの」で「神秘な闇にかこまれた世界」「みごもつた女にしかわからぬ根源的な生の実感の世界」と解している。すぐれた見解であろう。

⑥は歌集『花の原型』II「不在」の「瑠璃いろの朝」一連の中にある。突っ放した表現で子を詠じている。「鼻に皺よせて笑あふ」のは母親の心を見抜いて、阿諛や軽侮の念をふくんで笑っているのだろう。もはや「掌中の珠」などという優しいものではない。子にベタベタしない屈折した心情が鋭くうたわれていて、『乳房喪失』の中の「豊かな乳を今も保つ母の涙もろき盲点を子は利用する」等と共に、一種の醒めた「母うた」である。

(28) 斎藤 史

斎藤史は明治四十二年、東京の四谷に生まれた。父の劉は陸軍将校（職業軍人）で、しかも佐佐木信綱門下の歌人であった（昭和二十八年歿）。父の軍務につれ、旭川・津・小倉など各地を転住し、小倉高女卒業。その後、熊本を経て、昭和三年父が濟南事件の折、旅団長として出征していたことから引責退役したので、父と共に東京に転住した。昭和十一年に二・二六事件が起るや、父は反乱帮助の罪で入獄、禁錮五年の刑を受けた。史自身も、この事件の反乱将校栗原安秀中尉、坂井直中尉（いざれも死刑）との交遊の思い出を自著『遠景近景』（昭55・8）に書いている。これより先、昭和六年に彼女は医師の堯夫と結婚し、のち一男一女をあげた。昭和二十年戦争のため、父の郷里長野県に疎開。夫は長野赤十字病院長となつたが、のち退めて医院を開業、昭和五十年に死去する。史は長野市にそのまま住みつき、今日に至っている。

父が「心の花」系の歌人であった関係の影響もあって（父劉は幾つかの歌集や、『万葉名歌鑑賞』の如き研究書や、『獄中記』のような隨想記數冊等の著述がある）、彼女は大正末年頃より作歌を始め、昭和二年頃から「心の花」等に作品を発表している。昭和五年前川佐美雄らと「短歌作品」（のちの「日本歌人」）を発刊。昭和十四年父劉を中心として「短歌人」を創刊。昭和十五年には当時の歌壇の有力新人の作品を集めた『新風十人』に参加し、注目された。戦後復刊した「短歌人」を経て、昭和三十七年に歌誌「原型」を創刊、主宰してこんにちに及んでいる。古稀を超え、歌歴半世紀を超える、生命の長い現役歌人である。歌集は『魚歌』（昭15）、『歴年』（同）、『朱天』（昭18）、『やまぐに』（昭22）、『うたのゆくべ』（昭28）、『密閉部落』（昭34）、『風に燃す』（昭42）『ひたくれなる』（昭52、第十一回逍遙賞受賞）等があり、この他、自選歌集『風のやから』（昭55）、同『遠景』（昭55）や、厖大な『斎藤史全歌集』（昭52）がある。また、隨筆集『春寒記』（昭19）、前述のエッセイ集

『遠景近景』（昭55）や、歌論集『現代短歌人門』（昭29）もある。長篇小説が信濃毎日新聞に連載されたこともあり、多才な文筆家である。昭和三十五年に長野県文化功労賞を受けている。

彼女の歌風は反写実的で、モダニズムの影響を色濃くもち、芸術派歌人と称され、象徴風を加えた浪漫主義の華麗さと、実験的な意欲に支えられた剛直で機智に富む鋭さとを兼ねそなえている。

①暴力のかくうつくしき世に住みてひねもすうたふわ  
が子守うた

②生れ来てあまりきびしき世と思ふな母が手に持つ花  
花を見よ

③乳のますしぐさの何ぞけものめきかなしかりけり子  
といふものは

④雲などが流らるよと見てるるに全身をかけて子に  
頼らるる

⑤日昏れ寒く数枚の板戸押し閉し湯気立つものを子に  
食べしむ

⑥雨にぬれ冴えたる花も吾子の掌も我に向ひてひらく  
ならずや

⑦軋み曳くゆふべの車さむがれる子を上に乗せ烟より  
かへる

①から⑤までは廻女歌集『魚歌』より抄出。①と②は「濁流」と題する一連の中にある。昭和十一年作である。

この年は前述の如く二・二六事件の起った歴史的な年である。作者は三十才くらいの女盛りであった。「濁流」

とはいうまでもなく、世情ただならぬ時の流れを象徴的にいったのである。運命が扉を叩いていた。この両首

をふくむ七首の前には「五月廿日、章子語る。同廿九日、父反乱帮助の故を以て衛戍刑務所に拘置せらる」と

いう詞書がある。この暗い時代に作者は結婚し、子を産んだのであるが、父は反乱事件に関与していたことを娘には言わないで隠していた。そのようないたわりを受け

つつ、孩児を抱き、拘引された父の居ない家に帰つて來た、という歌がある。こんにちの繁栄社会の中で安穏に結婚し、出産しているのとは違つて、暴力が「うつく

し」とされたそのような切迫した社会の中で若い女性としての切実な生活を送ったのである。従つて、中野菊夫氏の述べるよう、「彼女がうたう子守歌は、戦前の疾風怒濤の日本を背景において考えるべきだし、その時代のなかでの若者をはずしては『暴力のうつくしき世』は理解しにくい」(斎藤史・前田透編『短歌読本 家族』(昭56・10) であろう。②の下句などはいかにも作者らしい、子供に対する呼びかけであるが、暗い世相下につくられた作品でありながら①②共にうつくしい歌で、私の愛誦歌である。③は「相」という題の一連の中にある。昭和十三年作である。この「子」も長女章子であるが、「乳のますしぐさ」を何と歎めく姿態動作であることが、どうたい、生物としての人間の親子の結縁を考えているのも、いかにもこの作者ならではと思われる。④も同年の作品で「灰」という一連にある。そのすぐ前の歌に「夫、教育召集を受け入隊す」という添え書があり、緊迫した日々が続いていた。しかし、そんな中でもやはり作者は

「べうべうと北の氷原のふぶく日はわれのけものもうそ

ぶき止まぬ」と非情のロマンを求めていたのである。あるいは「雲などが流らぶるよ」と天空に見とれていたのだろう。ところが、そういう母親も全身をかけて子に頼られているのだ、というのである。

⑤は「冬日」という題の一連にある。歌意は明瞭であるが、昭和十五年作で、そろそろ生活も苦しく緊縮せられてゆく時代だ。そんな中で、戸を閉して日暮れにあたかい煮物でもして子供に食べさせた、というのだろう。この作者としては写実的な生活詠である(「すまむ」というルビや、「食べ」という古語などは、やはり作者好みだが)。⑥は歌集『歴年』より抄出。昭和十五年作で「去来」という題の一連にある。花と吾が子の掌がともに私に向つてひらくではないか、という発想などは、いかにもロマン派歌人らしい。⑦は歌集『やまぐに』より抄出。作者も大方の疎開人と同じく、寒い信州上水内郡長沼村で村のりんご倉庫の片隅を借り、窮乏の生活を送った。昭和二十一年、疎開先での作者一家の生態のよく出ている歌である。

(お茶の水女子大学)